

播州神吉城と神吉合戦

＜神吉町内会 平成25年9月発行＞

天正6年(1578)2月下旬、織田信長の家臣羽柴秀吉は、中国地方の覇者毛利氏平定のため播磨国に下向し、糟屋(加須屋)氏の館(加古川城)に諸城主を集め、戦評定(加古川評定)を行いました。ところが、その直後、三木城主別所長治が毛利氏と結んで織田氏に反旗を翻し、加古川周辺の諸城も多くが別所氏に従いました。

4月に野口城(加古川市野口町)を攻め落とした織田軍は、6月、信長の長男信忠を総大将に神吉城(同市東神吉町)に押し寄せます。その軍勢は信長の二男北畠信雄、三男神戸信孝、佐久間信盛、丹羽長秀、滝川一益、明智光秀、荒木村重ら3万余人でした。



神吉合戦・敵兵の首を取る梶原冬庵奮戦のようす(三木市法界寺蔵「三木合戦図絵」)

一方、迎え撃つ神吉城の城兵は城主神吉民部太輔頼定(一説に民部少輔、長則などとも伝わる)、中津構居主の梶原冬庵(三木の援軍)ら1859人、あるいはは

1000余騎とも、1700余騎とも様々な伝えられています。なお、頼定は当時28歳か29歳で、別所長治と従兄弟同士であったといわれています。



城主神吉民部太輔頼定墓(常楽寺境内墓地)
※奥方は黒田官兵衛の娘ともいわれている

この神吉城の戦い、いわゆる神吉合戦について、比較的信頼(しんぴょう)性の高い信長の一代記「信長公記」には、次のような内容が記されています。

- ①城攻めは6月27日に開始され、城を包囲した織田軍は即時に外構を攻め破り、城を裸城にし、堀を突き崩し数刻(すうこく)攻め立てた。足軽と先を争った(信長三男の)神戸信孝が手を砕かれ負傷し、戦死者や負傷者が若干出た。一挙に攻略できないとみて一旦攻撃を緩(ゆる)めた。
- ②翌日、織田軍は竹束(たけたば)で鉄砲や矢を防ぎながら本城の堀際まで迫り、填草(うめくさ)で堀を埋め築山(つきやま)を築き攻め立てた。
- ③羽柴秀吉は但馬国で働いていたが、国衆を以前のように召し出し、竹田城に(弟の)木下秀長を入れ、書写へ自分の軍勢を陣取らせた。